

マタイによる福音書 28章 16-20節

今月は、イエス様のご復活の出来事を見て参りました。もし、この世に神がおられなければ、絶望は絶望でしかありませんし、死人は永遠に死人でしかありません。これらのことは、人間にはどうすることもできないことですが、その現実を覆すことのできる真の神、復活されたイエス・キリストが確かにおられる、ということを確認できた1ヵ月であったなら、神様は喜ばれると思います。信仰に基づいて生きるということは、人間から来る報いや人間の内から生じる喜び、充実感、達成感ではなく、神を思いイエス様の復活を信じることから始まると言えるのではないのでしょうか。

今朝は、イエス様のご復活された後、イエス様が弟子たちに命じられた御言葉に注目して参ります。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(18-20節)。イエス様は「すべての民をわたしの弟子にしなさい」と命じられ、全世界に向けて弟子たちを送り出しました。所謂、大宣教命令といわれている箇所です。

このように全世界に向けて送り出された弟子たちが、ある町に出かけ、イエス様を信じる人々の群れである教会ができると、その人々が出かけて行き、次の町の人々にイエス様のことを伝える。そしてその町にもイエス様の教会が生まれる。そのようにして町から町へ、国から国へと、イエス様のことが伝えられて、だんだんと教会は世界中に広がっていったのです。そしてこの日本の国にもイエス様のことが伝えられて、教会が立て上げられてきたわけです。

私たちの教会はそのような働きがあつてからこそ、去年は創立 80 周年という記念の時を持つことができたのです。弟子たちが、自分たちの力や人間の計画や思いによって実現したのではなく、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と宣言してくださった天と地の一切の権能を授かっている御方の約束があつたからこそです。

私たちの出番

かなり昔の話になりますが、私が神学校を卒業したばかりの頃の話です。ある集会に参加した時、当時の東京神学大学の学長であつたと思いますが、このようにおっしゃいました。「日本の教会が今、このようにあるということは、多くの宣教師が犠牲を払って日本にやってきて宣教したことによりよるものであることを忘れてはなりません。今度は私たちが世界に出て行って、恩返しをする時であります。」と、語られ、私の心に深く刻み込まれました。今でもその時の情景は目に浮かぶものです。

正に「受けるよりは与える方が幸いである」(使徒言行録 20 章 35 節)ではないのでしょうか。では、「与える」ことの幸いはどこから来ているのでしょうか。自分自身がイエス様から大きな恵みを受けたことによるものといえます。教会に集い、神様のみ言葉によって恵みを受け継ぐ者となった人々が、今度は御言葉を与え、伝えてゆくということになります。京都復興教会の信仰の先達者たちもまた、「受けるよりは与える方が幸いである」という幸いに生き、それが、今のこの教会の礎となっているのです。それこそ弾圧の歴史もあり多くの犠牲を払っても「与える幸い」の御言葉に立ち身をもって生き抜いた先達者の方々の遺産であり、今度は私たちが引き継いでゆく者とさせて頂きたいです。本日はこの後、教会定期総会が開かれますが、報告だけに終わらず、先ずはそのことを感謝をもって神の御前に出たいと願います。

ふるわれた者として

さて、イエス様はご復活され後、先へ先へと進まれるお方でした。「それから急いで言って弟子たちに告げなさい。『あの方は、死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる』(27 章7節)と記されています。ご復活された後、墓にはもう姿はなく、弟子たちより先にガリラヤへと向かいました。そこは、イエス様が活動された拠点であり、弟子たちも召命が与えられた原点でもあります。そこからイエス様と共に宣教へとでかけて行ったのです。

しかし、本日の箇所である 28 章 17 節に記されているように「疑うものもいた」と気になることが記されています。このことは、古今東西、いつもあることです。イエス様に失望する者もいます。従わない者もいます。決して綺麗ごとだけでは済まない現実が教会の歴史の中にはついてまわるものです。だからといって落胆する必要はありません。そこでふるいにかけてそこに残った者がまた神様の御用のために用いられてゆくのです。

「残りの者」の信仰と言われている言葉があります。それは、調理器具のふるいを想像して頂けると分かりやすいと思います。ケーキ等を焼くとき、粉をふるいにかけてますが、ふるいにかけることによってよりきめ細やかなスポンジができます。信仰の世界も同じで、信じることなく、従わない多くの者がいたとしても、ふるいにかけてられた純粹の残りの者が核となって、また福音が広がってゆくのです。正にそれが全世界の教会の歴史であります。私たちの教会は勿論、残りの者となって選ばれた者となってイエス様に従い福音の種を蒔くものであると信じています。

私たちが生きている今のこの世界は、人間の罪の暗闇が支配し、どこに光があるのか、この暗闇を抜け出す道はどこにあるのか、多くの人々は分からないでいます。このような只中であって、ついつい世の中が悪い、社会が悪いと不平を言いたくなってしまいます。しかし、イエス様から与えられた恵みに応えることが出来る者とさせて頂きたいものです。

イエス様はご復活されて弟子たちと喜び合って、良かった、良かった、ではありませんでした。ご復活後、弟子たちより先へ先へといかれ、福音を伝える者として弟子たちを整えられました。私たちも「イエス様を信じて復活の命を頂いたから大丈夫」という一人の信仰に安住するのではなく、イエス様は私たち一人ひとりを通してその働きの一端を担う者として、この世に遣わして下さっているのです。あの弟子たちがそうであったように、私たちもまたイエス様が与えくださった大宣教命令を共に受けとめ、御業を熱心に祈り求める者でありたいです。